
野口君観察日記。題名は変え・・・るのかな？。

inisie

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野口君観察日記。題名は変え・・・るのかな？。

【Nコード】

N9645X

【作者名】

inisie

【あらすじ】

野口君は主人公ではありません。観察対象です。ペットです。異世界ものです。

そんな所です。ヒロインが走り回る不思議なお話です。

では皆様私の日記をご覧ください。

1話：副題を考えるのがめんどくさい。（前書き）

第一話というより零話に近いです。
登場人物の自己紹介のお話ですね。

1話：副題を考えるのがめんどくさい。

夢を見た

幼馴染を刺し殺す夢を見た
胸から血が飛び出し顔にかかる

「わりい」

「いや、いいよ」

それだけで十分だった。

・・・なんだ今日の夢は

どこの厨二病だ！と叫びたくなる衝動を抑えベットから起きカーテンを開く。

陽射しが眩しい、今日は晴天のようだな。

ああ、いい朝だ、あんな血生臭い夢を見たとは思えない。

顔を時計へ向ける。

・・・ああ、いい朝だ・・・時計が9時という始業時刻を過ぎていなければ！

学校へ到着し先生に報告し今月10回目の遅刻ということで、少々
の説教を受け教室へ行く。

ふう、と一息、そこに声をかけられた。

幼馴染の野口君じゃないか。

「よう、おはよう？」

何故に疑問系といったところで時計を見る10時を過ぎていた。
疑問系も納得だ。

「今月何回目の遅刻だ？2桁のったか？」

おお良く分かった、こいつは私の遅刻の回数まで暇だからといって
数えているのか。

ストーカーなのか？おお怖い怖い。

「馬鹿やろう！心配してる幼馴染になんて態度だよ。まあ遅刻も程
ほどにしとけよ？」

分かっている。確か150回遅刻すると1ヶ月分の欠席と同じだから、
ほぼ進学は出来ないだろう？推薦ももらえなくなりそうだ。

「そういう事を言ってるじゃねーけどなあ・・・まあそこらへんは
お前は分かってやってんだろうからいいんだがな」

二人で手を繋ぎながら教室へ行く。

「何故手をつなぐ！いやいやいやいや離せ！このまま教室に行つた
ら玄関口まで迎えにいった変な奴だと思われるだろ！生徒会長の俺
を変人に仕立て上げる気か！」

うるさいと一蹴。元々お前は変人だ。これ以上に変人になれるわけ
がない。むしろ変人に失礼だ。変人に土下座をしろ。

「・・・」

口をぱくぱくさせている。ふむ面白い顔だ。魚の真似か。私もして
みよう、ぱくぱく

「お前・・・後で覚えてろよ・・・」

覚えておくわけが無い。そこまで遊んだ所で手を離し先に行く野口
君。

ああ説明がまだだったな自己紹介だ。

18歳 185cm 体重75kg 髪は黒のショート ツンツン

頭だな。

学力テスト校内1位

スポーツにおいては陸上で県大会3位

囲碁部においては団体戦県2位

全国弁論大会においては理事長賞だったかな？

顔はまあまあ整ってる異性にはそこそこもてるだろう

それでいて生徒会長をやっているという！

なんとも忙しい野口^{のぐち} 克也^{かつや}君！

私にはまったく真似できないよと頷いていると教室に到着した。
何故か身震いした。どこぞの見えない世界からツツコミが来た気がした。

気のせいだろう。うん気のせいだろう。

教室のドアを開く。皆の目が私に向く友人達に挨拶をし自分の席につく。

そこへもう一人の幼馴染の顔があった。

「おはよう？今日はどうしたの？」

寝坊した。絢子さん今日も可愛いね。絶世の美女のようだね。きつと絢子さんを見たら卑弥呼だろうとクレオパトラだろうとベアトリ―チェだろうと逃げ出すだろうね。

「ありがとう？けど3大美人をあげるんだったら卑弥呼じゃなくて楊貴妃だし、もう一人はちょっと良く分からないよ？」

なんと！卑弥呼ではなかったのか。まあなんでもいいじゃないか。ああ後もう一人は絢子さんは一生関わらないで欲しいジャンルかな。気にしないで。

と、チャイムになる。

「あつ後でゆっくりお話しようねー。」

若干間延びた声で去って行く絢子さん。さて後で授業の準備だ。あれ？鞆の中身が昨日のままだった。まあいいか。どうせ私は学校にいる間ほぼ、一つの科目しか勉強しないのだから。

さてここで自己紹介といこうか

校内美少女ランキング3位

もうここで分かったと思うけれども小林^{こばやし} 絢子^{あやこ}さんのことだ。

眉目秀麗、頭脳明晰、スポーツでも体育程度にならずソツなくこなし、誰にでも優しい。と3

拍子どころか4拍子揃ってしまった日本3大美女の一人だろう。

身長は160cmぐらい？ 体重は45kg〜48kgぐらいだろう。

髪はロングの金髪な訳はなくショートの薄茶色といったところか。

そろそろこれは自己紹介ではなく、他人紹介と言った方がいいのだろう。

2時限目の授業が始まる。数学のようだ。ふむふむ今日は小テストか。

15分で終わらせる。さて野口君のほうはと、前を見てみる、寝てる。生徒会長さん。やっぱり貴方は変人です。先生の目の前の席で寝れるその度胸。私にはとても真似出来ません。

先生の苦笑した顔を見てみなさい。

生徒会長で学年一位それに加えて普段は品行方正な貴方がテストが終わったといって寝てても注意できないでしょうが。

しょうがないですね、ここは私が一肌脱いであげますね。先生、後でパンを奢ってくれてもいいんですよ？

ガタツと席を立つ。先生にテストを手渡す。周りを見回す。全員がこちらを見てる。

ニヤニヤしてる人と頭に？をつけている人の二通りかな。

野口君に近づく、髪がささりそうだ。バリカンを持ってきてこの草畑を刈ってやろうか。

と耳元にふうーと息を吹きかける。

ガバツと起き上がる。

「な、な、なにしy」

某野球漫画のように言う カッチャン！南を甲子園につれてって！

「誰がカッちゃんか！南！この野郎！」
教室内は大爆笑の渦につつまれた。

さて、ここで自己紹介をしよう。

久坂くさか南私みなみの名前だ。

身長は155cm 体重は40kgぐらいなはずだ。最近計つてないからなんとも言えないが。

髪は漆黒といって良いほどの黒 長さは腰元ぐらいまではあるだろう。

スポーツは普通 クラスで浮く程下手でもなく
ピアノが少し出来る。

勉強に関してはそこそこの学年で30番目ぐらいといったところか？
趣味は人間観察というか野口君観察。

部活は囲碁部の部長をしている！部員3名だ！

絢子さん程ではないがそこそこの顔は整っていると思う。
あえて言うなら釣り目がちなのが傷といったところか？

私の特徴を言うならばそんな所だろうか？

：野口君の観察は面白いな。

皆にも体験してほしいところだが、この後の体験談を聞いた後でも
体験したいと思うならばだけどな。

1話：副題を考えるのがめんどくさい。（後書き）

この度は見て頂きありがとうございます。

まあ堅苦しい文はどうでもいいとして、み、みてくれてありがとうございます！
なんていわないんだからね！

ではでは失礼致しました。

2話：異世界ものじゃなくて学園物？（前書き）

第2話です。

学校パート終了です。

さて、勝手に動いていくキャラクター達に翻弄されながら頑張っていこうと思います。

2話：異世界ものじゃなくて学園物？

ふむ、2時限目の数学が平和に終わった。

野口君を見てみると机に顔を乗せて寝た振りをしているようだ。この後のことを考えると憂鬱なのだろう。

分かる。今の私がそうだ。

「ねえねえ！野口君とはどういう関係なの！？」

クラスの女生徒が3人、私の机の前に立っている。

ああこの子達は初めて私達と同じクラスになった子か。

他にも何人かこちらを窺っているな。

彼氏だよと言。将来を誓いあっているんだ。

歓声が巻き起こる。

「南！てめえ何いってやがる！ただの幼馴染だろうが！」

野口君寝たふりは終わったのかい？

幼馴染だね。学校が一緒になったのは高校生からだ。

「あーあー学校が一緒じゃないのに幼馴染なのは学区が違うからだ。南の家と俺の家隣なんだが道路を隔てて中学と小学の学区が違うんだ。」

その通り歩いて3分もかからないのにも関わらず学校が違う。まあ私達の愛の前ではそんな道路なぞ障害にもならないがな。

「うるせえ！俺が彼女居ないのは99%お前のせいだからな！」

「けど、二人共高校では一緒なんだね。一緒にいたいから高校一緒にしたの？」

ぴくっと野口君が反応する。その反応は微妙だね。きちんと反論し

ないとまた誤解を招くよ野口君。

そうなんだ。私がこの高校を選んだら野口君と一緒に居たいと言いだしてね。

私としては断る理由がまったくないから了解したのだが。

「嘘をつけ！嘘を！近くの高校選んだらお前がいて、理由を聞いたらまったく一緒だったじゃねえか！」

そうなんだ。本当は色恋沙汰はまったくないんだ。けれども野口君は私を愛してくれているんだ。少し前から廃れてきてるツンデレというやつかな。困った困った。

「…」

また口をぽくぽくとさせている。

野口君は魚の真似が得意なんだね。私も真似をしよう　ぽくぽく

「もういい…疲れた。」

まあそんな関係なんだ。ご理解出来たかな？婦女子諸君。

「う、うん分かった。野口君…頑張ってね！応援してるよ！」

何をだろうとツツコミたくはなったが応援してくれているよ野口君。

3時限目の科学が始まる。

そこで絢子さんのほうを向く。ぷくーとふくれた後、ため息をしているのが見えた。

うん。とても可愛いよ絢子さん。どこをどう見ても絶世の美女だ。

よそ見をしていると先生が入ってくる。部活の顧問だ。

「久坂：今日は遅刻してないか？」

名指しでのご指名。はいしていません。科学には間に合いました。

「それは遅刻したっていうんだ。はあ…もう少し遅刻は無くせ。」

もう少し心労を減らしてあげたほうがいいだろう。今年で定年退職というのに私という問題児を抱えていては休むに休めないのだろう。さて科学に関しては、あまり問題ないので先ほどの夢に関して考えていこう。

まず、私には予知夢と言われる能力がある。範囲としては、かなり限定されている。私の身の周りに起こる事に加えて寝ている間の夢だけではなく、突然眩暈がして数分後の光景が頭に思い浮かぶというパターンもある。

今回は前者のようだ。

まあ・・・予知夢程大げさではないか。外れる場合もあるのだから。突拍子も無い場合は100%今の所外れている。後、私が関わっていないことを見た場合も100%だな。例えばだがクラスメイト全員がゾンビになる夢や、野口君に彼女が出来たとかだな。だが私自身が夢に出て、かつハッキリ覚えている。喋った言葉まで覚えている。この場合は当たる可能性がかなり高い。

では、何故私が野口君を刺す夢を見たのか。あまりにも突拍子も無い夢は当たらないのか。けれども、もしかしたら本当に野口君を刺してしまう場面でもあるというのか。

：ありえないな。野口君は変人だが品行方正であり、悪事というのを働く場面が想像つかない。

ん？私が野口君をあまりに嫌いになって刺す可能性か？

ありえないな。私が嫌いになったら刺すだけでは済まないだろう。

前後の会話も気になる所だが、思い出せるのは野口君が謝罪をし、私とその謝罪を受け取っている。その場面しか夢の記憶がない。

ふむ…まあいいだろう。もし正夢なのならば逆夢にしてしまえばいいのだから。

キスでもすれば大丈夫だろう。

…ん？野口君の様子が変だな。頭がふらふらしてる。眠いのか？先程のアレでは目が覚めなかったのか？

いや、おかしい2年以上野口君を見てきた私だから言えるあの様子はおかしい。

倒れてもおかしくなさそうだな。すぐに動けるように…

…背中が光った？いや…野口君が光ってるように見…私は走り出した。

間に合ってくれ。

野口君が消えそうだ。

体の半分が消えている。

指が消えるその一瞬。

私の中指が引っ掛かった。

ふう…一体君は何度面白い場面を見せてくれるのかな。

金色に輝きだしたときは某サイヤ人にでもなるのかと思ったよ。

薄れる思考の中で、そんな事を考えていた。

2話：異世界ものじゃなくて学園物？（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

最後まで読んでなくてもクリックしてくれてありがとうございます。

とりあえず2話終了です。

3話目からは異世界編ですね。

どうなるかは予想が付きません。

キャラクターが勝手に続きをやってくれるでしょう。

ではまた。

3話：異世界もの。(前書き)

本番開始。

3話：異世界もの。

ん・・・硬い・・・床で寝てるぐらいに硬い。

朝が弱い私がこんなにすっきりと起きれるのは珍しい。

・・・喉が渴いたな。

起きて水を飲みにいこう。

そう思った瞬間ハツとする。

野口君はどうした？

周りを見渡す、どこにもいない。

・・・ここはどこだ。森の中のようだが手入れがされている。

森の中の広場といったところか。

ここまで綺麗に円形に広場を作る公園でもあるのか。

ガサッ

音がした。

野口君か？それとも他の人か？

警戒度を上げ音のした方向を見る。

そこから出てきたのは金色の髪をした見た目20歳前後のお兄さんだ。

「君は誰だ？」と日本語で話しかけてきた。

言葉は通じるようで安心した。ここは日本のどこかのような。

私は自己紹介と友人を探していることを説明した。

「君のような黒髪で短髪で身長は私より少し高いと」
考えてる素振りが似合う人だと思った。

「ああ申し訳ない。淑女の前で自己紹介もしないとは失礼した。
私の名前はエル・シュタイン この家を警備しているんだ。」

警備員？警備員がいる家とは・・・ここは公園ではなく家の一角なのか。

「ああ、こんな所で話すのも失礼だな。本宅へは連れていけないが
私達が寝泊りする所へ案内しよう。
そこなら座れる所も飲み物も用意できる。」
すごく嬉しかった。喉が渴いていたから水をもらえると嬉しい

警備員の詰め所へ向かう途中

「珍しいね」と一言

なにがですか？と聞き返すと

「その髪の色だよ。私は23年間生きてきて髪が黒い人間は初めて
みた。どこか遠い国の人なのかい？」

・・・その言葉が本当だとしたら、ここは日本ではないことが確定
する。

もしかしたら言葉のアヤで私みたいな綺麗な黒髪の人は見た時がな
いというナンパの台詞なのだろうか？・・・ないかな。
曖昧な返事を返しておく。

応接室というかソファ―室のような部屋へ通された。

「飲み物は何がいい？」

水かコーヒーがいいです。

「すまん。コーヒーとはなんだ？」

・・・水を下さい。

コーヒーを知らない世界・・・あり得るの・・・？自分の中で自問自答を繰り返す。

もしかしたら、ここは未開の秘境みたいな所なのか・・・？

「ミナミ・・・ミナミ！」

ハッとした呼ばれていたようだ。

「ミナミはこれからどうするんだい？1日ぐらいならここに泊めてあげないこともないけれど。友達を探すなら一番近くの町まで送っていくよ？」

私の中で警報が鳴っている。

一番近くの街までどれぐらいかかるのか聞いた

「2日はかかるかな？それがどうしたんだい？」

・・・99%確定した。ここは日本ではなく地球ではない可能性が高い。

もし地球だったとしたら孤島のと真ん中か、アフリカ等の奥地に近いだろう。

けれども、こんな大きなお屋敷がサバンナ等のと真ん中に立っている訳がないから後者は却下。

前者の可能性を信じて、移動方法を聞いてみる。

「馬を使うつもりだよ？ミナミは乗れるかい？」

これで島という線もほぼ消えた。

・・・野口君・・・君はどこまで特別なんだい？
それが良い所なんだけれどもね。

「ああミナミ。僕は主の所へ報告へ行ってくる。君の事も少し話をしなければいけないだろうから時間がかかりそうだ。ここでゆっくりとしているといいよ。」

と、言い席を立つエル。

ちようどいいな、私も考えを纏めたい所だ。

さてここは、私がいた世界ではない可能性が高い。

第一に野口君に触れた後、私は庭という名の広場で寝ていた。

第二に移動方法が馬。これはない。どんな遊牧民なのだろうか。

もしかしたらモンゴル等では？という可能性もなくはないが、どうみてもエルという人はアジア系ではない。

まず、私は何をすればいい？

野口君を捜す。日本に帰る。この二つが最たるもの。

お金はどうするか・・・胸ポケットにいれた1000円のみ。

持ち物。鞆は無し。ボールペンが1本。電池が3本の圏外の携帯電話。

服は制服。スカート。ブレザー。ブレザーの下に着た黒のセーター。

・・・詰んでるような気がする。

野口君・・・恨みたくなるよ・・・絢子さんはどうしてるかな。

あの笑顔が見られないのは私の精神的疲労度が20%増しになりそうだ。

まあ悲観的に考えてもしょうがない。こういう異世界の小説とかではいきなり山賊やら盗賊とかに会って奴隷になるとかもある。そう考えたら私はましなほう・・・とか思えるわけないだろう！

絶対見つけて、抱きしめて引っぱたいてやる・・・。

報酬は君の体だ、野口君。

精々体を洗って待っていてくれたまえ。

・・・おかしいな。あれから2時間がたった。説明に時間がかかっているのか？

クラッと私の体がぶれた。

眩暈か久々だな。

私が縛られている姿が見えた。

・・・野口君は緊縛の趣味でも出来たのか・・・と思いたいがまず違うだろう。

私は動揺でもしていたのか。どんなにみんなに落ち着いていると言われているにも私も人間だからな。

おかしい点があったな、何故エルはあれだけ親切なのだ。

私にそれだけのメリットがあるか？いや、ないな。まったくの初対面の人間をここまで歓待してくれる。話を聞いてくれるのは有り難いが、ここが私の居た日本とは違うという事を踏まえるとあり得ないな。

・・・ここから出た方がいいか。それともエルは本当に親切で初めて会った人にも関わらず助けてくれるのか。

後者だった場合は有り難く街まで送ってもらおう。けれども前者だ

った場合と先程の眩暈。
どうするか。

・・・野口君。君ならどうする？皆を引っ張ってきた君なら・・・

3話：異世界もの。（後書き）

第3話の終了。異世界編開始です。
次からは野口君探しの旅へ。いけるのか・・・？

4話：他人のフラグブレイカー（前書き）

異世界編第2話。

4話：他人のフラグブレイカー

野口君・・・君ならどうするかな？

・・・いや、君は頭はいいが単純な所があるからな。

私が小学生の時からいつも抑えてきたじゃないか。

なら、いつもの私でいこう。

さて、どこから逃げるべきか。

取りあえず、ドアからか。誰かいるか？いると予想するべきだろう。保留。

窓、開くがこれは無理だな。私がスレンダーとは言え空気窓から出るのは無理だろう。胸か肩が引っ掛かるだろう。野口君が聞いたら引っ掛かる程ミナミに胸はねーよとか言われそうだな。フッフ。

壁、無理だな。私には念を使うことはできないから壁を壊すのは不可能だな。

上、壁があるだけか。

ん？照明がない？照明は横壁に掛っているのか、照明を見してみる。

外せるようだな。ただの球体？電池はどこから入れるのだろうか？まあ貰っておこう。鞆が欲しい所だな。

とりあえずドアでいこう。どうやって外に出るかだな。

内側からノックをする。誰かいたら返事をするだろう。

「あーどうしましたか？」返事があった。

ふむ、お手洗いにいきたいと伝える。

驚いた。緑の髪だ。ピッコロさんもびっくりだな。

お手洗いに案内される。こちらを振り向いた瞬間、腕を振り抜いた。

ふむ。綺麗に顎にはいったようで安心した。

1時間は起きないだろう。出来れば護身用のものが欲しいのだが、ナイフが入ったポーチがあるな。

ここにライトを入れて腰につけておこう。

慎重に外に出る。移動手段が欲しい所だな。後できればスカート以外の服が欲しい。

取りあえずスカートは折ってある部分を伸ばしておこう。

野口君が居ないのならばミニの意味はないだろう。

警備の詰め所という割りには人数がいなかったな。本宅と庭の警備中といったところか。

取りあえず街道方向へ向かおう。

・・・ふむ土の地面。明らかにタイヤではない車輪のものがまっすぐ向かってるな。

街はこちらか。馬で2日となると大きな街へは4日はかかるとみていいな。

途中に小さな村があることを祈ろう。

街道沿いの森の中を歩く。これは・・・きついな。多分だが追手は居る可能性がある。そのまま街道を歩く気にはならない。

水が欲しい所だ。飲み物か食べ物をそろそろ手に入れないとな。火

があれば草木は食べれるものがありそうだが。ライターはないし。FFやDQよろしく手をかざして呪文を唱えれば火が出ればありがたいのだがな。

目の前が炎上した。驚いた。これはどうしたとか。メラやファイヤというのは存在したのか。

この世界はあり得ないな。だから異世界か。MPはどこに表示されるんだ。

まあいい。なんでもいい。火を手に入れたのだから。

半日ばかり歩いた所に、小さな村が街道沿いにあった。

さすがに私もカロリー補給がしたい。どんなに低コストで動く私の体でも1日食べないで歩き通すのは無理だ。それに会話がしたい。野口君をいじりたい。ふむ、野口君は私にとって必要な栄養素だったのかもしれない。それに気づけただけでもこの1日は有意義だっただろう。

村の様子を見る。人が数人・・・外を歩いているな。強盗は出来ればしたくないのだが・・・最悪背に腹は変えられないか。

・・・私は今、村で食事をしている。

「お嬢ちゃん！すごいな！どれだけ食べるんだ。」

すごい大きな声で笑ってる。少し恥ずかしいな。お腹が空いていたとはいえ食べ過ぎたか。

この人は村の宿屋を経営しているサースさんというらしい。

「いや、さっきは助かったよ。あいつは村の作物を潰す、柵は壊すと来るたびに村が荒らされてな。」

ごめんなさい、私も作物を奪おうとしていました。

「さっきのは、なんだったんだい？掌から火の玉が飛び出してきてたが？」

私の国の国民的英雄の勇者から教えてもらったんです。

「あっはっは！そりゃいいな。うちの国だけではなくて、他の国にも勇者がいるのか。」

数十分前・・・

私は村の脇で様子を窺っていたところ、2mはあろう猪が村の畑に突進してきていた。

見ているだけにしようと思ったのだが、村人達が鍬を構えて立っている所を見ると害を与えるものと分かり、その時には火を出していたのだ。

1回でその猪は燃え上がり、そのまま横に倒れてしまった。

これは、この魔法は強いのだろうか？それとも猪が弱いのだろうか？判別しかねるところではある。

ん？先程の会話に変な所がなかった？勇者？本当に存在するのかそんな人間が。

「今回の勇者は強いみたいだぜ。大柄で髪の色はお嬢ちゃんみたいな黒髪、大柄な割に足が速くてモンスターなんかじゃ速さでついていけないみたいだな。」

・・・なんだろう。その人物にはすごい心当たりがあるのだけでも。そのような特徴なら他にも多くいるだろう？

というかモンスターがいるんですか。本当にDQとかFFの世界観ですね。

私はあまりゲームをしないんですけれども、分かりやすくて助かります。

「ああ確か、ここに配布された紙があったな。国から配布されたやつ。母ちゃんー！どこへやったっけー？」

そこには、こう書いてあった。

新しい勇者が我が国。イスターナ皇国に誕生した。

名は カツヤ ノグチ

足が速く、頭も良く、魔法も使える。

我が国は、これよりモンスターを退治し、この国に永遠の平和をもたらそう！

とまあ長々と書いてあったのを略すと、こんな感じ。

・・・野口君、君は本当に本当に面白いですね。

段々と最初に見た夢の内容が本当になっていくようですよ。

大局には逆らえないのでしょうか・・・？

いや、愛の前には神様だろうと神龍だろうと、全て、何も関係ないのですよ。

私は野口君を抱きしめて、殴って日本に連れ帰るだけです。

楽しみです。私がこんな苦勞をしている中、貴方はどんどんフラグを立てていそうです。

私がいる限り、そのフラグをバキバキにたたき折って差し上げましょう。

4話：他人のフラグブレイカー（後書き）

第4話終了。

5話：回想という名の妄想。 (前書き)

ん・・・？

前書き？

いらなんでしょう？
いる？

・・・よろしく願います。

5話：回想という名の妄想。

ふう・・・と一息。

夜になったな。1日で色々なことが起きすぎだ。

野口君に触ったら異世界らしき所へ。

起きたら人の家の庭で寝てて。

その家の警備員を殴って。

逃げ出して。

村へ行く途中に火を出して。

猪を倒して。

今は、体を拭いていると。

どうして、こうなったんだ。

普段ならば、野口君の事を考えながら、1時間はお風呂に入っている時間か。

浴槽とは言わないでも、せめてシャワーが欲しい所だ。

まあ体が洗えるだけでも良しとするべきか・・・。

野口君と出会う前の私なら、こんなに長くお風呂には入らなかったのだがな。

髪を布で拭っていると、思い出す。

小学生のときのことを、あの時の私は髪は短かったな。

男子に負けず劣らずの喧嘩をして、口では負けた時はなかったな。

フッフ。

野口君もそういえば、いつも私に口で負けて泣きそうになっていたな。

あの頃は可愛かった。ああ違った。今も可愛いな。

「おい、久坂！」

呼ばれて振り向く。昨日、あれだけ負かされておいてまた来たのか。

「今日はかけっこで勝負だ！」

ふむ、良いだろう。ここからその木まででどうだい？

「久坂。今日こそお前を負かす！泣くまで負かしてやる！」

良いだろういつでもいいぞ。

「ドン！」

二人で走り出す。トップスピードにのった。今日は負ける気がしない。

ゴールだね。野口君。今日も私の勝ちのようだよ？君は何度負ければ気がすむんだい？さて、私は宿題をするから家に帰るね。

「ぐぐぐ・・・じゃあ宿題をどっちが先に終わらせるか勝負だ！」

良いだろう。じゃあ私の家へいこうか。

「分かった。ランドセル置いたらそっちへ行く。」

お母さん。今日も野口君が来るから来たら私の部屋へ通して。

「ふふ、今日もなの？。仲がいいのね。ジュース用意しておくから来たらもっていくわね。」

「ただいま！」

ここは君の家ではないのだがな。それにしても大きな声だ。

「久坂ー！今日は俺のほうは算数のドリルだ！」

私のほうは漢字の書き取りだな。

じゃあ始めようか。

二人で黙々と宿題を進める。二人共無言だ。

「うーん……。あー……。えーっと。」

うるさい。無言ではなかった。野口君、君は喋らないと勉強ができないのかい？

「いいじゃねーか！これぐらい喋った内にはいらないうろ？・・・ん？」

終わりだね。私は終わったよ。

「・・・くそっ。また負けかよ！」

いいじゃないか。算数なら私が見てあげれるよ？隣に座ってもいいかい？

「あ、ああ……。いいけど・・・」

ん？どうしたんだい？

「なんでもねーよ！」

うるさい。

「・・・」

無言になった。

「うーん・・・」

ここはだね。この式を使ってだね。

その時、ノックがした。

お母さんか、カフェオレとオレンジジュースだね。

いつも通りだ。

「少し休憩したらどう？ずっと勉強するのも体の毒よ。」

そうだね。お母さん。

野口君、少し休憩にしよう。

カフェオレを私の前にオレンジジュースを野口君の前に。

「久坂ーなん・・・」

南だ、野口君。

「み・・・、それ名前だろ？」

ああそうだね。名前で呼んで欲しいんだ。

「嫌だね。まあ俺が勝負に勝ったら呼んでやってもいいかな。俺とお前はライバルだろ？そういうものは名前で呼び合わないんだよ！そうなのか。なら仕方ないか。では一生私は名前を呼ばれないな。」

「なんで俺が一生負けてる前提なんだよ！！見てろよ！絶対にお前を負かしてやる！」

それはいいのだが、さっきは何を言おうとしたんだい？

「ああ・・・久坂は、なんでカフェオレなんて苦いの飲んでんだ？美味しいのか？それとも大人ぶってるのか！？」

うるさい。

ああ無言になられては困る。美味しいよ。カフェオレはそんなに苦くないからね。飲んでみるかい？

「・・・う、ん・・・分かった飲む。」

なんで野口君は、そんなに顔が赤くなっているのかな？

「うるせえ！赤くなんてねえよ！」

うるさい。

「・・・」

飲んでいるようだ。

「にげえ！超にげえ！ウルトラにげえ！！」
うるさい。

「・・・」

「・・・こんな苦いもの良く飲めるな。よしっ！俺も飲めるようにする！おばさーん！俺も今度からかふえおれをいれてくれー！」

「良いわよ。けど無理しないでね。」

笑顔で話すお母さん。

雨が降る日だった。

お母さんのお葬式だった。

「トラックに挟まれたんだってね。ほとんど見る影もなかった」

「しっ。子供の近くですよ。」

「あっごめんなさい。」

そんな声が聞こえてきた。

私は黒い服を着ていた。お父さんは忙しそうだった。

庭にいこう。少し落ち着こう。

野口君が雨が降る庭に立っていた。泣いていたようだ。

「ぐすっ・・・あ・・・久坂。」

きずいたようだ。目が赤い。

やあ野口君、今日は来てくれてありがとう。

お母さんも野口君の事が好きだったからね。

「あ、ああ久坂は落ち着いているんだな。もっと・・・」

そうだね。動揺はしてると思うけど、思ったよりは・・・といった所かな。

「・・・なあ久坂。」

なんだい？

抱きしめられた。なんでだろう・・・？

「・・・南。落ち着いた振りだろ？俺達これでも5年も一緒にいるんだぜ？」

名前では呼ばないんじゃないかなかったのかい？ライバルはなんとやらじやなかったのかい？

「お前も良くそんなの覚えてるな。」

笑っている。なんだか悲しそうな笑顔だった。

「南・・・俺、頑張るよ。」

何をだい？

「なんでもだ。」

そうか。

「ああ・・・南が頼れるぐらいの人になるよ。」

ああ・・・分かった。

その日は庭の見える部屋で野口君の膝枕で寝てしまったようだ。

・・・その時からだったかな。髪を伸ばし出したのは、7年か。伸びる訳だ。

腰まで伸ばすつもりは無かったのだがな。

野口君。君は今何をしているのかな。私が頼れる人なんだろう？
私がそっちに行くまでにある程度は終わらせておいてくれると助かるよ。

窓の外を見ながらそんな事を思ってしまった。

5話：回想という名の妄想。 (後書き)

第5話終了。

小学生時の回想。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9645x/>

野口君観察日記。題名は変え・・・るのかな？。

2011年10月29日05時26分発行